

「昨夜は好く眠つたか」といふや否や、もう話は學問の方面に這入つて近く。先生は自分の爲に主に英語で話されたが、その英語には獨逸語も混れば露西亞語もまじる、餘程珍妙なものであつた、令息の夫人が「お父さんの英語が解りますか」と茶の時にそつと聞かれたことから考へて見るに、珍妙に思つたのは必らずしも自分の知識の足りない爲ばかりでは無かつたと思つて居る、それでも學問に關係したことは大概差支なく了解された。日記には此の朝聞いた話として次のやうな意味が書いてある。「學問は世界的でなければならぬ。研究資料の如きは公にして一般の研鑽に待たねばならぬ。自分は老年で餘命幾何もないが、今後の生命を世界の學界の爲に、自分の辭書（前記トルコ語方言集）の完成に捧げる積りである。新材料によつて新語を發見すれば、一つでも多く辭書の中に入れて置きたいと思ふ外に願はない。此の點に多少ともに寄與して呉れるならば幸である。獨逸の若い學者等は名を馳するにのみ急で、自分を罵るが、彼等から自分の辭書を取り去つたならば果して何が出来るだらうか」。獨逸の學者殊にル・コック氏と先生との間柄の悪かつた事は、前から雙方の著述によつて知つては居たが、かく迄とは思はなかつた。實に此の朝ル・コック氏を罵倒された時には、顔は赤くほてり、息ははづみ、震へる杖の先きで地面をつゝきまはして憤激された。平靜な日常の態度の間には認めることの出来ないかゝる峻烈なる性格の一面は、思ふに少壯時代の名残であらう。

片腕に先生を扶けながら松林を歩きまはつて、家に歸ると直ぐまた研究にかゝる。フィンランドの滯留はかくして過ぎた。露都に歸つてイヴノフ教授に電話をかけた時に老博士の精勵を知つて居らるゝ教授は、自分が弱つたに違ないと考へて、笑ひながら「無有益に日を過したらう」といはれたので、日ばかりではない、夜も有益に過した